

－ 原 著 －

乳児の情動の調整における＜調整する－される＞という関係の検討 －生後半年間における三世代の関わりをめぐる－

塚 田 みちる

A study of Infant's Emotional Regulations in Terms of the Relation to
“Regulating Emotion and Emotion Been Regulated”:
Observing a Three Generational Relationship between a Grandmother a Mother and a
Half-a-Year-Old.

Michiru TSUKADA

和文要約

本研究では、子どもの情動の調整を＜調整する－される＞という関係のありようとして検討した。出産前後に里帰りをして第一子を子育て中の母親と乳児、祖母を対象に、三者の日常生活の場に筆者が出向いて関与観察を行い、そこでの体験をもとにしたエピソード記述を分析対象にした。分析は、観察場面から印象に残った出来事を抽出し、それらに共通して含まれる＜調整する－される＞という関係のありようを対象とした。その結果、2つのエピソードを提示した。1つめは、子どもの機嫌の良さが母親と祖母の働きかけによってさらに増す様子を示した。2つめは、子どもをなかなか寝かしつけられない母親の対応を示した。これらを読み解いていくと、「間主観的把握」などの「関係発達論」の鍵概念に辿り着いた。新米母親にとって、子どもの情動状態によって母親自身の気持ち調整されてしまい、自分の思う方向に子どもの情動を調整することの難しさが示唆された。

キーワード：三世代 初めての子育て 情動調整 関係発達論 エピソード記述

問題と目的

乳児が快・不快の情動を表出することは多く知られているところであるが、こうした情動表出が周囲の大人たちの気持ちを動かし、たとえ生後間もない時期であっても相互の情動の動きを基礎に関わり合うことができる。本研究では、乳児の情動を調整するありようを、乳児と、初めて子育てをする母親、その母親の母親（祖母）との三者関係のありようの変化という視点で検討する。

生後間もない時期のやり取りは、親が子どもの微かな身体動作の変化を捉え、子どもに「思

い」がある（ある情動状態にある、ある気持ちでいる）と思ひなして関わることで成り立つ¹⁾。なお、ここでは子どもの「思い」の総体を「子どもの情動のありよう」と捉えることとする。すなわち母親は子どもの思いを受け止め、子どもと同じ情動状態になろうとしたり、逆に、子どもに親の望む行動が表れて欲しいという願いから、子どもの情動を膨らませたり、逆に鎮めたりするかたちで情動を調整しようとする。このようなやり取りにおいて母親は決して一方的に自分の望む方向に子どもの思いを引っ張るのではなく、子どもの思いを受け止めることで、まずは親の情動状態が調整され、そこから新たな方向へ自分の情動状態を調整する働きが生まれ、それが親の働きかけとして現れる¹⁾。

では、第一子の子育てを始めたばかりの「新米お母さん」にとって、子どもの情動状態によって「調整される」ということはどのように経験されるのだろうか。それはまず自分の情動状態や気分をとことん子どものそれに合わせていくということを意味している。初めて子育てをする者にとって、このことは決して容易なことではないであろう。大倉²⁾が指摘するように、現代の若者の多くが自己決定による自己実現を至上価値と捉えており、いかにしたら自分の思い描く人生が送れるかということに関心を抱いている。たとえ結婚して子育てに向かうようになって、その描かれた思いに合うように自分の人生の中に取り入れていこうとする傾向にある。そうした傾向にある大人が初めての子育てで直面することは、これまでのように自分に合うものを周囲から取り込むだけでは通用せず、自分が周囲に合わせていくという対応が求められる²⁾。すなわち子育てでは、自分の思い通りにならないことを受け入れていかねばならない時がある。このとき子どもの情動状態によって調整されるという受け身的な側面がクローズアップされてくる。この側面を実感することは、親になったという新たな自覚や、子育てへの積極的な構えにもつながっていくであろう。

今、親となった母親もかつては子どもであり、自分の母親によって育てられた存在である。その過程において、自分の情動状態や思いをかつて自分の母親によって調整されたという経験を有している。それが下敷きとなって母親は今、我が子の情動状態によって調整されるという関係を作り上げようとしていると考えられる。本研究では、母親が初めての子育てに際して里帰りをした状況を取り上げ、母親 - 乳児 - 祖母の三者関係のありようを「関係発達論」とその方法論³⁾⁴⁾に依拠して検討する。

1) 子どもの情動調整を扱った研究

Stern⁵⁾によれば、生後間もない時期の乳児の対人的経験は、力動的情動を介して他者と共にあるものとして経験される。たとえば、乳児が母親に抱きあげてもらったとき、乳児はその抱き上げられ方に強く勢いがあると感じることがあるだろう。また、穏やかでゆったりしていると感じることもあるだろう。強く勢いのある感じや穏やかでゆったりした感じなどは、他者の関わりによって乳児に感じられる力動的情動である。このような力動的情動の経験の仕方は、親が子どもの身体から発せられる力動的情動を感受して（「いま気持ちいいんだな」等）、

親が調整してくれる仕方そのものである。この時期の乳児にとって親が「乳児の自己を調整する他者 (self-regulatory other)」であるという意味は、親が子どもの身体から発せられる情動を感受して、それを膨らませたり、逆に鎮めたりしながら、子どもに満足感や安心感を与えるところにある。もちろん乳児もいずれは自分で自分の情動を調整できるようになり、そうなったときにそれを自己調整と呼ぶのは何ら不思議ではない。けれども、それ以前の誕生まもない時期の乳児の情動は、乳児自身による調整ではなく、周囲の大人によって調整されるのが一般的なはずである。ただし、その大人による調整のありようは、決して大人の一方通行の働きかけなのではない。そのことが冒頭に述べた筆者の問題意識である。

ところで、こうした乳児の情動調整に限らず、子育て中の親をサポートする取組みは子育て支援活動という枠組みでさまざまに取り組まれている⁶⁾⁷⁾⁸⁾。なかでも、親のそのまた親世代(祖父母世代)との交流を通して、子育て中の親の孤立化や、一人で子育てに悩んでいる母親の不安を少しでも軽減しようという取り組みがなされている。たとえば、奈良県子育て家庭サポートセンター⁶⁾の報告によれば、親世代は祖父母世代に「積極的に子育てに参加して欲しい」と肯定的であり、祖父母世代も世代間交流を通して「文化の伝達」「知恵の伝達」「親の悩み相談」という面での支援に意欲的であるという。その一方で、両者が交流することで「子育ての仕方の違い」「育児方針の違い」といった違和感があることを両世代共に問題として挙げており、親の中には違う意見を言われると批判されたように感じる場合もあるという。

これらの研究から次の2点を考えることができる。1つ目は、子どもの情動調整は養育者の情動のありようと切り離して考えることはできないという点である。2つ目は、人生のいかなる時期においても、新たな対人関係が形作られるときに、大人の自己調整のありようは変化する可能性があるという点である。たとえば結婚や出産といった大きなライフイベントを経て初めての子育てをする時、子どもの情動のありようを調整する者として親にもこれまでの自己調整のありように変化が生じると考えられる。とりわけ誕生まもない子どもの情動の調整は、子どもの情動の動きに親が引きずられるという点では、子どもの情動によって親の情動のありようが調整される一面を持ち、しかし他方で、親が自らの情動を動かして子どもの情動を調整するという一面も持つというように、きわめて錯綜した関係にある。ところが、この誕生まもない時期の＜調整する－される＞という関係の機微を扱った研究は少なく、冒頭に引いた鯨岡の「原初的コミュニケーション」の研究¹⁾に一部見られる程度である。そこで次に、人と人との関係形成における心のありようを論じている「関係発達論」³⁾等について述べる。

2)「関係発達論」とその方法論である「関与観察とエピソード記述」

関係発達論は、従来の発達心理学では目に見える「行動」と「能力の獲得」にあまりにも比重を置き過ぎていることへの批判の上に成り立つ斬新な発達の考え方である。確かに、子どもが育つ過程で、いつ頃どのような行動が出現し何ができるようになるかを知ることは、子どもを育てる者によって目に見える指標になる。そうすると「平均的」な能力発達が関心事になる。

しかし、この平均的な能力発達の考えが優勢になると「子どもの心の育ち」に目が向かわなくなるのではないか、というのが関係発達論の見方である。つまり、関係発達論で問題にしているのは、一人の人間としての育ち、そのらしさ（その人らしさ）の育ちといったその人の全体としてのありようであり、それが子どもの心の育ちを考えることになるのだということに集約される。

そして、子どもの心は周囲の他者に「育てられて育つ」という立場、すなわち、子どもの心の育ちは大人との関わりのありようと切り離して論じることとはできないという立場に立っている。子どもの行動の背景にある「思い」は直接的に目で見ることとはできない。たとえ言葉で表現されたとしても、思いのすべてを適切に表現することは幼い子どもには難しい。だからといって子どもに思いがないわけではない。それをいかに周囲の大人が感じ取って対応するかは、その後の子どもの心の育ちを左右すると言っても過言ではない。たとえば子どものちょっとした仕草を捉えて、子どもの今の興味関心を感じ取り、それを認める対応をすることで、子どもの興味が一層膨らみますますやる気になることがあるだろう。逆に、せっかく膨らんだ興味が大人の心ない対応によって小さく萎んでしまいやる気を失わせてしまうこともある。このように子どもの心の動きは大人との関係の結び結び方に委ねられている。つまり子どもと養育者は、それぞれ別個の身体を持つという意味では別個の存在と言えるが、特に幼少期において実は決して切り離して考えることのできない一つのまとまりであるというのが関係発達論の中核にある考え方である⁹⁾¹⁰⁾。この関係発達論において、言葉によらないやり取りが主となる時期のやり取りを「原初的コミュニケーション」と呼んでいる¹⁾。

① 「原初的コミュニケーション」という関わり合いのかたち

ここまで見てきたように、子どもの心の育ちは子どもの思いを周囲がいかに感じ取り対応するかという周囲の他者との関わりのありように委ねられている。このような関わり合いの根底には、まずもって養育者に子どもと気持ちの繋がりを作りたいという願いがある。こうした気持ちの繋がりを作ろうとするやり取りを「原初的コミュニケーション」と言う¹⁾。このコミュニケーションには、次に示す「いつも、すでに」というメタ水準の関心、「成り込み」「巻き込み」という3つの特徴がある。

② 「いつも、すでに」というメタ水準の関心と「成り込み」「巻き込み」

「いつも、すでに」というメタ水準の関心は「いつも、すでにこの子に関心を向けてしまっている」ということであり、子どもを常に良い状態においておきたいという深い気遣いや配慮のことである。そしてこの関心のありようが、子どものちょっとした身体の動きや身体から発する志向を感受することをもたらす。たとえば乳児がガラガラをじっと見ているとき、ガラガラを「取って欲しい」と受け止めるなどである。乳児の身体から発する志向を母親が受け止めることは、子どもの行動への単なる意味づけではない。乳児が本当に欲しいと思ったから取ってあげたのではなく、親には子どもが欲しがっているように感受されたから取ってあげたのであ

る。「いまこの」瞬間において自分の「ここ」から相手の「そこ」に気持ちを持ち出し、「ここ」を「そこ」に重ね合わせて、相手の「そこ」を一時的に生きる様態を鯨岡¹⁾は「成り込み」と呼んでいる。つまり自分が「ここ」にいて相手を眺めて相手の気持ちが分かったというものではなく、相手の「そこ」に出かけて行って、いつとき相手に成りかわって共に生きることと言える。

親の成り込みが子どもに成りかわる関わりであるとすれば、「巻き込み」は養育する人の意図する方向に子どもを誘おう、ある状態に持っていこうとする関わりである。もちろんこの巻き込みはやみくもになされるものではなく、子どもに成り込むことを媒介に、子どもにある行動が自発的に表れて欲しいという願いのもとになされることが多い。つまり親の巻き込みによる関わりは、子どもへの成り込みを媒介にして、子どもに現れて欲しいことがまずもって親の身体に現れ、その身体の動きが子どもの身体に浸透して、親の望む行動が子どもに現れるというかたちを取ることが多い。そしてこの成り込みと巻き込みのありように個人差が生じ、鯨岡¹⁾はそれを養育者の自己性の発露ととらえている。

この成り込みと巻き込みを情動調整という観点から言い換えると、親が子どもに成り込むとき、親の情動状態は子どもによって調整されている。そして親はそれを媒介にして新しい方向へ自分の情動状態を調整する動きを生じさせる。この動きが子どもに向かうとき、巻き込みになるのである。一方、子どもの情動状態も親の情動の動きによって調整され、そこから新たな方向へ自分の情動状態を調整する動きが生まれ、それが親への働きかけとして表れる¹¹⁾。このように親子のあいだでは＜調整する－される＞という関係が、互いに生じていると考えられる。そして上に述べたような＜調整する－される＞という関係が成り立つとき、その媒介となるのは我々の身体である。そこで次に、身体によって感受し合うということを「関係発達論」の方法論¹²⁾と関連付けて述べる。

③ 「関与観察とエピソード記述」という方法論

我々の身体は今ここでの関わりにおいて、相手が経験しつつあることを、その相手の身体の動きを通して敏感に感受できる場合がしばしばある。さらに、その感受したものが自らの身体の表面におのずから滲み出てきてしまうということもある。つまり相手の身体で感じられることが、なぜか自分の身体で起きているかのように感じられてしまうことがある。こうした事態を、私とあなたの＜あいだ＞でトンネルが繋がってあなたの＜主観（気持ち）＞がこちらに伝わってきたという意味で「間主観的把握」という¹⁾¹³⁾。先に述べた原初的コミュニケーションは、この間主観的把握なしにかたち作ることとはできない。もちろん主観は直接見ることはできない。だから身体を通してそれを感受する態度が必要になってくる。その態度で観察する方法が「関与観察」である¹²⁾。

間主観的把握を通して子どもの気持ちを感じ取って通じ合おうとすることには、互いの気持ちがぴったり重なった心地よさをもたらすことがある一方で、通じ合えないもどかしさが生じ

ることも起こり得る。子どもとの関わりの中で、養育者は子どもの今の気持ちは分かるけれども、できれば「そうしないで欲しい」という思いを抱く時がある。そうすると養育者は二つの相反する気持ちのあいだで葛藤を抱えることになる。こうしたせめぎ合う二つの気持ちを一人の人間が抱くことを「両義性」という¹⁴⁾。両義性は子どもと養育者の関係に限らず、どんな対人関係にも起こることで、「あちらを立てればこちらが立たず」という二律背反的な事態を指している。

このように身体を介して感受される心の動きは、関わり場に当事者として関わっている（関与観察をしている）者でなければわからないことである。そこに生じている各々の心の動き—養育者、乳児、関与観察者自身の心の動き—を描き出す手法が「エピソード記述」である¹²⁾。すなわち、エピソード記述には客観的な行動のみならず、関与観察者が間主観的に把握した各々の心の動きも含めたやり取りの流れが記述される。

以上述べてきたことを踏まえて、本研究では、生後間もない時期の子どもの情動調整のありようを、母親・乳児・祖母の三者のあいだで生じる＜調整する—される＞という関係のありようとして検討する。

方法

1) 協力者

関西地区に住むW児（2009年6月生の女児）を対象に2009年8月から1年間データを収集した。家庭訪問に先立ち、文書にて観察目的と方法の説明を行い協力者から同意を得た。母親は出産前後に里帰りをした。

2) 手続き

訪問回数は里帰り先へ5回、本児宅へ7回であった。訪問中は母子と祖母と自然なかたちで関わるという関与観察を行った。観察場面は、協力者の許可を得てすべてDVカメラで録画した。DVカメラは部屋の一角に固定せずに観察者が手に持って協力者のそばに座るようにした。ただし、子どもを抱っこするときなど必要に応じてカメラを手から放して、録画することそのものよりも親子と自然な形で関わることに重点を置いた。録画時間は1回の訪問につき2～3時間であった。

3) 資料の整理および分析

訪問終了後、その日の観察のあらましを書きとめる初次記録を行い、中でも観察者の印象に残った出来事を中心に抽出した。その多くは、乳児との関わりにおいて母親と祖母との三者のあいだに一体感や安心感を感じ取ることできた出来事であった。こうした出来事がいくつか積み重なり、これらが何を表していたのかを煮詰めていったときに、この三者のあいだに＜調整する—される＞という関係が成り立っていることが浮き彫りになった。そこで以降、この出来事をエピソードとして記述した。エピソード記述の構成は次のとおりである。

＜背景＞は、書き手のエピソードを書く動機、もしくは書き手の関心の所在、さらには関与観察の場がどういう場であるか、エピソード場面がどういう状況であるかが読み手に分かるような情報が提示されている。＜エピソード＞本体は、場面のあるがままの流れを時系列に沿って描き出したものである。客観的に観察できる行動と、観察者が親子のあいだの思いと意思の交流や彼らと観察者との思いと意思の交流など、目には見えないけれども観察者に間主観的に把握された箇所が表現されている。＜メタ観察＞は書き手の理論的関心に基づいて、そのエピソードの意味が捉え直されるかたちになっている。

結果・考察

1) 母親の里帰りをめぐるあらまし

祖母（観察当時50代後半）はすでに子育ては一段落し、子どもたちが独立した後は夫婦のみで生活していた。Nさん（以降、エピソード中の表現はお母さん）やWちゃんと一緒のときは「快活なおばあちゃん」という印象であった。一方、Nさんは独身の時は一人暮らしをしており仕事に夢中になる毎日であった。30歳のときに結婚そして妊娠という運びになった。Nさんは産後も仕事を継続する予定であったが体調がすぐれず退職せざるを得なくなり、出産予定の2か月前より実家に里帰りをして安静に過ごすことになった。予定日より1カ月弱早い出産であったが元気な女兒（Wちゃん）を出産した。ところが出産後のNさんの体調がさらに悪くなり出産直後から安静に過ごさなければならなくなった。そのため里帰り先の実家では、おのずとWちゃんの世話は祖母が全面的に引き受けることになった。その後Nさんが復調するまで実家での生活が続き、里帰り期間は産前産後合わせて7ヶ月間となった。

以下には、生後半年までのWちゃんと母親、祖母、観察者である私の関わり合いの様相を2つのエピソードで示す。これらの関わり合いの変容過程を読み解くことで、母子間の情動調整のありようを＜調整する－される＞という関係に焦点を当てて見ていくことにする。

2) エピソード1：Wちゃんにとって母親も祖母も大事な他者であるということ

以下は、Wちゃんが生後1ヶ月時に、Wちゃんと母親、祖母のやり取りからWちゃんを包み込むような温かい雰囲気が二人から感受されたエピソードである。

＜背景＞

この日はWちゃん宅への訪問初日であった。お母さんは私の訪問中、片時も離さずWちゃんを抱っこしていた。その抱っこの様子は「小さいWちゃんを大事に抱きかかえている」といった感じで、初めての子育てで何をしてあげたらいいかわからないけれど、まずは抱っこしたいという思いがひしひしと伝わってきた。小さい子どもとどのように関わったらいいかわからず戸惑う様子は、日頃から保育現場に出入りしてベテラン保育士の様子を見ることが多い私にとって、かえって新鮮に映った。それで、お母さんにこれまでの子どもとの関わり方の経験を尋ねたところ、子どもの頃弟の面倒を見たきりで大人になってからは全くないとのことであっ

た。一方、祖母は「やっとここまでできました」とようやく息が付けるようになったという面持ちで、これまでの出産前後の経緯について話してくれた。その話から、「どうなることかと気をもんだけれど、何とかここまで辿り着いた」という安堵感が伝わってきた。以下は、そのような会話の後で、祖母がいったん席を外し、母親がWちゃんに関わったときのエピソードである。

<エピソード1> ばあばが来たー！

Wちゃんが私にもっと見えるようにとお母さんがWちゃんを布団に寝かせてくれた。Wちゃんはとてもご機嫌な様子で頭を動かしたり手足をバタバタさせたりしている。愛らしいその仕草を見ているだけで私は嬉しくなり、思わず「Wちゃん」と呼びかける。Wちゃんが腕をブンと振り下ろすのを見て返事をしてくれたようで、いっそう嬉しくなった。お母さんもWちゃんに顔を寄せて吸い込まれるようにWちゃんを見つめている。ようやくWちゃんを下に降ろしたけれど、一時も離れずに触れ合っていたいといった感じであった。そこへ台所から祖母が近づいてくる足音がして「Wちゃん」と呼ぶ声が聞こえてきた。その声の調子がとても明るく心地よく響いた。それと同時に、Wちゃんの手足が一段と勢いよく動き、目が輝いて見えた。祖母がWちゃんの枕元に近づくとWちゃんがしきりに頭を動かす。祖母が「Wちゃん、いたー」と笑いかけると、Wちゃんはその笑顔に應えるかのように身体全体に一層力を入れた。私は祖母が近づいてきてからのWちゃんの様子にとっても驚いた。まだ生まれて間もないのに「嬉しいがっている」ように見えたからである。それで、Wちゃん、お母さん、祖母の3人の姿をまじまじと見ながら、「Wちゃんは、お母さんもおばあちゃんも大好きなんだなあ」と思い感動してしまった。

<メタ観察>

初めての訪問日、事前に祖母からこれまでの経緯は電話で聞いていたので母親の様子を心配しながらの訪問であったが、母親は思ったより元気そうであったしWちゃんも終始機嫌がよく、全体的にとっても落ち着いた雰囲気を感じられた。背景で述べたように、母親がWちゃんを一日中抱っこしていられるほど元気になったことや、生後間もないWちゃんが元気に育っている様子により安堵できるようになったということが、全体的に落ち着いた雰囲気をもたらすことに繋がったと思われる。

このような落ち着いた日々を過ごせるようになった中、エピソードはWちゃんをあやすという、どの家庭にもみられるひと時であった。にもかかわらず、私はとても驚いてしまったのである。それはエピソード後半にあるように祖母の呼びかけへのWちゃんの反応がきっかけであった。祖母が来る前もWちゃんは十分に機嫌よく見えた。そこへ祖母が来てWちゃんに呼びかけた。そのときのWちゃんの目の輝きが増す様子、全身に込められた力の強さに驚かされたのである。Wちゃんのこの気持ちの高まりの出所は何であろうか。そう考えた時、Wちゃんと周囲の関わりとのあいだで生じた目に見えない心の交流を考えずにはいられない。そこで、それぞ

れの心の交流という観点からエピソードをなぞってみる。

エピソード冒頭での私とのやり取りでWちゃんは終始ご機嫌であった。その機嫌の良さに私は思わず引き込まれて「Wちゃん」と呼びかけたのだと思う。その呼びかけがWちゃんに心地よく響いたのだろうか。腕を振り下ろす動作にも機嫌の良さが感じられてしまった。この部分だけを見るとWちゃんは私とのやり取りでご機嫌になったように読めるが、それだけではないと思う。その直前までお母さんにずっと抱っこされていて、その心地よさがWちゃんの身体を満たしていた。それが下敷きとなって、私とのやり取りにつながったのだと思われる。実際、お母さんはWちゃんの頬に触れんばかりに顔を寄せたり身体をトントンしたりしていた。「Wちゃんと同じ気持ちでいたい」「Wちゃんと一緒に心地よくいたい」という母親の思いが身体接触を通してWちゃんの身体に浸透しているように見えた。

そこに祖母が加わった。Wちゃんの名を明るいトーンで呼ぶ声は、単に音声として名前を呼んだだけではない。そこには心地よく優しい響きがあり「少しの間傍を離れていたけれども、Wちゃんのことをいつも気にしていた」というような温かい響きにも聞こえた。その温かい雰囲気包み込まれたかのように、私自身、その声に心地よさを感じた。そう感じながらふとWちゃんを見ると、今まで以上にイキイキして見える。生後1か月の赤ちゃんがこんなに目を輝かせたり、全身に力を込めて身体を突っ張らせたり、勢いよく手足を動かしたりするものだろうか。ここではWちゃんのこの振る舞いが、祖母の働きかけによって醸し出された明るくそして温かい雰囲気と同期して生じたことに注意したい。Wちゃんの動作はその雰囲気がWちゃんの身体に浸透した結果なのではないか。

このようにエピソードをなぞってみると2つのことを指摘できる。1つは、私の驚きの出所に私の「間主観的把握」があったことだ。すなわち、Wちゃんの何気ない動作を単なる動きと見るのではなく、その動きに伴われるWちゃんの機嫌の良さや心地よさが私の身体に沁み込んできて、それに応えるかたちで名前を呼んでしまったことである。つまりこのときの呼びかけは名前を呼ぼうとして呼んだというより（つまり意図的に呼んだというより）、心地よさに誘われるように呼んでしまったといったものである。ここに行動レベルだけでなく、目に見えない気分（心地よさなど）の浸透という「間主観的把握」の概念を導入して乳児との関わりを読み解かねばならない理由がある。

さらに2つめは、母親や祖母のWちゃんへの目には見えない気遣いや配慮が間主観的に感受されたということである。つまりWちゃんの身体を満たしている心地よさは、Wちゃんに「よい気持ちでいて欲しい」という周りの大人の願いが浸透した結果ではないか、ということである。これは鯨岡¹⁾が「いつも、すでに」というメタ水準の関心として指摘するもので、子どもへの深い気遣いや配慮に相当するものであろう。エピソードの背景で述べたように、Wちゃんのお母さんは出産前後に体調を崩した状態での子育てのスタートであった。里帰りして心身ともにサポートを受けているであろうが、これまで小さい子どもと関わった経験も少なく、初

めて子育てをすることは不安や戸惑いが多々あると思われる。にもかかわらずWちゃんにいつも身体を触れているのは、Wちゃんと何とか繋がりたい、Wちゃんと同じ気持ちでいたいという思いの表れではないだろうか。つまりWちゃんに成り込むという態勢がお母さんにすでに準備されていて、それが一時も離れずに触れ合っているという振る舞いに表れたように思う。

そして、このように初めての子育てにおいて、比較的早い時期に我が子の情動状態に十分に成り込めるようになった背景に「祖母の存在」があったことを見過ごすことはできない。出産によって体調を崩した娘の心配、Wちゃん世話への責任、また一家の主婦として家事全般をこなすなど心を砕くことは際限なくあるだろう。そのような中でも落ち着いた雰囲気や心地よい響きを醸し出すことができるのは、初めての子育てに入り込もうとする娘やWちゃんの双方を「よい具合にしてあげたい」という構えがあるからだだろう。後になって考えてみると、このような構えにあることで、祖母は母親に対して生後間もないWちゃんとのやり取りの手本となっていたのではないだろうか。ただし、手本となるやり方は、母親に意図的に言葉を使って伝えたり教えたりというかたちではなく、Wちゃんと母親を包み込むような関わりというかたちなのである。つまり、これまでの生活の中で祖母がWちゃんの情動状態に成り込むとき、祖母がしているように新米母親もWちゃんに成り込み、情動がおのずと調整されることがあったのだろう。その結果、Wちゃんに成り込むという態勢がもたらされたのではないだろうか。このように祖母がWちゃんと新米母親の両方を包み込んで＜調整する－される＞という関係を作り上げている、その包容力の大きさを感じて、私自身、感動にも似た驚きを感じたのだと思う。

3) エピソード2：Wちゃんと母親と祖母の三者でつくりだされた一体感

以下は、Wちゃんが生後4か月時、Wちゃんを寝かしつける場面において、母親、Wちゃん、祖母のやり取りから三者の一体感を感受したエピソードである。

<背景>

この日は3回目の里帰り先への訪問であった。私がWちゃんを抱っこすると、お母さんが「ちょっと眠いんやね」と言うように、Wちゃんの目はとろんとして今にも眠りそうであった。しかし私を見ると興味のほうが上回って私をじっと見たり、やはり眠くてうとうとしかけては不快な声をあげたりしたのでお母さんと二人がかりであやし続けた。

これまでの訪問中にも、Wちゃんがちょっと寝ぐずることが何回かあった。そういうときお母さんは「何がいやなんやろ」「すぐ泣いてる」とすぐさま心配そうになるので、祖母がWちゃんだけでなく、お母さんもなだめようとしていることが見られた。たとえば「そんなの泣いたうちに入らんよ。たまに寝そびれたときにわーんって泣くときもあるけど、それでも最近は自分で上手に指吸いしてすっと寝ることあるなぁ」と話すときなどである。こういうときの口調はとても温かい感じで「Wちゃんは泣いても指吸いしても何しててもかわいいねぇ」という気持ちが感じられた。

以下は、お母さんがWちゃんの泣き声とともに落ち着かない気持ちになり、なかなか寝かし

つけることができなかったが、やがて祖母に見守られてゆったりとWちゃんを寝かしつけたというエピソードである。

<エピソード> 母になった娘に唄う子守唄

Wちゃんを抱っこしてあやすもなかなか寝つかない間、お母さんは台所にいる祖母とWちゃんを交互に見ながら「機嫌悪いなぁ」とつぶやくなど落ち着かなくなってきた。祖母はフンフンと生返事で台所仕事をしている。しばらくして祖母も加わるが抱っこを代わる様子はない。お母さんが抱っこして一生懸命にあやしているの、祖母と私は少し離れたところに座って見守ることにした。そうこうしているうちに、とうとう唸るような泣き方になった。そのとき祖母が「あ、怒った」と言っとうなずき、同時にお母さんがすっと立ち上がって身体をゆったりと揺らし始めた。祖母の一言で場の雰囲気がさっと変わったように感じた。そしてこのとき私はざわざわと落ち着かない気持ちを抱いていて自分にハッとした。そこでまずは自分が落ち着きたくてその場の静かな雰囲気に溶け込もうと目を伏せた。そのとき、私の目の端に身体を揺らしている祖母の姿がちらっと見えた。それと同時に唄うようなハミングが微かに聞こえてきた。そのメロディは私にはまったく聞き覚えがなかったけれども、その耳触りがとても心地よくて私は思わず目を閉じた。しばしそのような中で穏やかな時間が経過した。気が付くとハミングが聞こえなくなっていたので、私はそっと目を開けた。すると祖母と目が合い互いに微笑んだが、私は少し気恥ずかしくもあった。このときになってようやく、あのハミングは祖母の唄う子守唄であったことに気づいた。Wちゃんを見るとすっかり寝入っている。お母さんとも目が合って微笑み合った。

<メタ観察>

目の前の子どもに泣かれると何とも落ち着かない気持ちになるもので、この日、私の訪問で寝そびれてしまったWちゃんをお母さんと二人であの手この手であやし続けた。このエピソードを行動レベルで見れば、ぐずり声を上げてなかなか寝付かないWちゃんをお母さんが身体を揺らしながらあやし、祖母が子守歌を歌うことで子どもが寝ついたということに集約される。もし、このような行為だけが子どもの寝かしつけの場面で生じているのだとしたら、寝ぐずる子どもを前に落ち着かなくなることはないだろう。では、なぜ、そうした気持ちを抱いてしまうのだろうか。そこでWちゃん、母親、祖母、私のあいだに焦点を当ててエピソードをなぞってみる。

Wちゃんがなかなか寝つかない間、Wちゃんのぐずり声に呼応するように、だんだんとお母さんも落ち着かない様子になってきた。「機嫌悪いなぁ」というつぶやきは誰に向けられたものなのか判然としない。いずれにしてもそのような面持ちで懸命にあやしている最中には、Wちゃんは寝つくことはなかった。いやむしろ、それどころか一層ぐずり声を上げてとうとう唸るように泣き始めてしまったのである。抱っこという身体接触を通して、お母さんの落ち着かないさまが伝わってしまったのだろうか。

この「寝かせたい」のに「寝てくれない」という煮詰まった状態に風穴を開けたのは、祖母の一言だったと思う。これを契機にお母さんが立ち上がって寝かし始める姿からは、それまでの落ち着いたさが鎮まったように感じられた。エピソードの中盤で「場の雰囲気さがさっと変わった」と私が感じたのは、お母さんの肩の力が抜けていくらかリラックスした状態に感じられたからだと思われる。

お母さんがいくらかリラックスした一方で、私は未だにWちゃんの泣き声にとらわれて気持ちがざわつき、なかなか落ち着くことができなかった。それとは対照的なお母さんのリラックスした様子を目の前にして、そのことにハッと気付いたのである。しかし気づいたものの、そう簡単に落ち着くことができない。いまや静かな雰囲気になっているこの場に身を委ねたかったが、どうしたらよいのか分からず私はまごまごしていた。そのとき私の横にいた祖母の身体が揺れているのが見えた。そのゆっくりとした揺れ方が目の前のお母さんの揺れ方に同期している。かすかなハミングのリズムもその揺れに同期しているように聞こえる。ゆらーっと同期したそれらが全体として優しく心地よい雰囲気を作り出していて、その心地よさが私の身体に沁み通っていくのを感じた。そしていつのまにかそれに浸ってしまい穏やかな気持ちになっていた。祖母と目が合い微笑みあったものの少し気恥ずかしくなってしまったのは、穏やかな気持ちにさせてもらって、まるで私があやされているかのように思えたからである。いまやWちゃんはすっかり寝入っている。お母さんとも目が合い微笑みあった時、お母さんもすっかり落ち着き払っていた。

ところで、お母さんはなぜ、落ち着いた状態に向かうことになったのか。後になって気付いたことであるが、祖母が、お母さんとWちゃんに生じている負の状態を受け止めてくれた、とお母さんが感じたからではないだろうか。つまり、Wちゃんは寝つけず不快な状態であった。お母さんはWちゃんの負の状態と「寝て欲しい」という自分の思いの両方を抱えていた。これら二つは矛盾した（両義的な）もので、お母さんはこれらを抱えて葛藤し困惑していた。このとき祖母が「怒った」と表現したのは、まさに母親の心情そのものではなかったかと思うが、祖母がそう表現したのは「そういう気持ちなんだよね。うまくいかないときもあるよね」と受け止めてあげたいという思いがふと言葉になって表れたのだ、と今になって思う。自分たち二人ではどうにも動きが見いだせないところを祖母に受け止めてもらったことで、お母さんに少し余裕が出て肩の力が抜けたように見えたのだと思われる。

このようにエピソードをなぞってみると、2つのことを指摘できる。1つは子どもの負の状態を受け止めることの難しさである。目の前の我が子が寝ぐずって泣けば、たいていの母親は何かせずにはいられない、「泣き止んで欲しい」と願ってしまう。エピソードで見たように落ち着いた気持ちを抱きながらやし続ける場合もあるだろう。ここには我が子に「こうなって欲しい」、もっと言えば「自分の思い通りになって欲しい」という思いがあることが見て取れる。子どもに「不快である」という思いがあるのと同じように、母親にも思いがある。この

とき一方的に母親の思いに子どもの思いを巻き込んで、母親の思う方向に持っていかうとしてしまうこともあるだろう。しかし実際は子どもの思いは簡単には動かないので、そのことで苛立ってしまうこともしばしば起こる。ここに子どもの負の状態への対応の難しさがあるといえるだろう。一方、祖母の対応のように、寝ぐずって泣く子どもの様子に「泣きたい時もあるよね」と今の子どもの状態をゆったり受け止めるという対応もある。つまり子どもの負の状態を「そういう状態なのだ」とそのまま認めるということであり、そのとき子どもと同じ情動状態になることで養育者の思いが「調整される」ということが生じる。そして、そこから今度は子どもに「気持ちよく寝入って欲しい」という方向への対応が紡ぎだされ、子どもの情動状態を調整してゆく。そしてこの動きに応じて子どもも不快な状態が調整されて、気持ちよさに向かってゆく。ここに、子どもと養育者とのあいだで＜調整する－される＞という関係が生じていると考えれば、寝ぐずる子どもがあやされて気持ちよく寝入ることが理解できるのではないだろうか。

ここで再度強調したいことは、負の状態を抱えているお母さんとWちゃんのあいだに＜調整する－される＞という関係が生じるきっかけとして「祖母の存在」があったことである。祖母に受け止めてもらったと感じられたからこそ、お母さんの気持ちは「Wちゃんは今、そういう気持ちなのだ」という方向に調整されて、そこから祖母と同期しながらゆったりと心地よさの方向にWちゃんの情動を調整していったのではないか。まさに祖母と母親とのあいだにも＜調整する－される＞という関係が作り出されており、お母さんとWちゃんとのあいだでの＜調整する－される＞という関係と重層的になっていることがうかがえる。さらに言えば、祖母は母親と同じ気持ちになることでWちゃんをあやしていたわけでもあり、その意味においては祖母とWちゃんとのあいだにも＜調整する－される＞という関係が生じていたとみることができるだろう。先のエピソード1でも見たように、ここでも祖母は寝ぐずる子どもの寝かしつけの方法を指示的に伝えるのではなく、＜調整する－される＞という関係を作り出すことで母親を支えていたと見ることができる。もっと言えば、我が子の情動状態を膨らませたり、逆に鎮めたりするような関わりをつくり出すことは、新米母親にとっては難しい。そのところを、祖母が支えたことでうまく展開し、母親が落ち着いた心持ちになることができた。ここに初めての子育てに臨む母親への支援のあり方をうかがうことができるであろう。

2つめに指摘したいことは、エピソードの前半で私が感じた「ざわざわと落ち着かない気持ち」の出所である。ここで注目したいのは、私の落ち着かなさはお母さんのそれと連動するかたちで生じ、やがて祖母の醸し出す温かい雰囲気浸ることで落ち着いたということである。つまり私はエピソードの前半では、母親に自分を重ね、それゆえ母親のおろおろした様子に共振して落ち着かなくなってしまった。母親の負の状態に巻き込まれてしまい、何とか次の動きを作り出そうとするが、そうすればするほど、うまくいかない現実に向き合います身動きが取れなくなり苛立ちが募っていった。一足早く落ち着きを取り戻した母親とは対照的に、い

つまでもそのような苛立ちを引きずってまごまごしていたのは、そのためであろう。今振り返ってみると、当時、勤務校の学生への心理的支援が必要な場面で、同じように、学生の負の状態に巻き込まれて身動きが取れず、その後の展開がうまく作れないことを経験することがあった。そういう自分への苛立ちが、困惑する母親をうまく支援できない自分と重なっていたように思う。心理的支援をするということの内実がどういふことなのか分らず、悶々としていた当時の自分にとって、この時の祖母の対応に浸れた経験、そのときまるで子どものようにあやされて安心感や満足感を抱けたことは、まさに開眼する思いであった。

まとめ

本研究は、乳児の情動が調整されていく様子を、母親・乳児・祖母のあいだでの調整する一されるという関係のありようとして捉えることを目的とした。そのために三者の日常生活の場に筆者が出向いて関与観察を行い、そこでの筆者の体験を目に見える行動だけでなく、各々のあいだの目に見えない思い（情動状態など）が交錯するありようも含めてエピソード記述を行った。その結果、エピソード1では筆者とWちゃんとのやり取りで見られたWちゃんの機嫌の良さと、母親がWちゃんに身体接触しながら関わる様子とが呼応していた。さらに祖母との関わりでWちゃんの機嫌の良さが一層増したことが示された。このときWちゃんの身体を満たしていた心地よさは、母親の「Wちゃんと一緒に心地よくいたい」という思いが身体接触を通してWちゃんに浸透し、それが下敷きとなっていたところに、さらに祖母の明るい声のトーンが沁み込んで、Wちゃんの心地よさを膨らませたことがうかがえた。このことから、養育者の心境について考察してゆくと「間主観的把握」や「いつも、すでに」というメタ水準の関心、さらには「成り込み」¹⁾という概念に辿り着いた。とりわけ身体接触を通して子どもに成り込む態勢が生後1か月時に母親にすでに準備されており、これが「新米お母さん」の特徴であることが示唆された。続くエピソード2では、寝ぐずるWちゃんを母親が寝かしつけようとしてもうまくいかなかったが、祖母に見守られることで母親がゆとりを持てるようになると、ゆったりと寝かしつけることができた。このことから「新米お母さん」にとって、子どもが負の状態にある時に、「今はそういう気分なんだね」と子どもに成り込んだり（子どもに調整されたり）、そこから子どもを快の状態に巻き込んだり（子どもの気持ちを調整したり）することの難しさが示唆された。この難しさを突き詰めて考察してゆくと、成り込むことをベースにした「巻き込み」¹⁾の概念や、母親が矛盾する二つの思いを抱くという「両義性」¹⁴⁾の概念に辿り着いた。すなわち自分の思いに強く引っ張りたいという方向と、子どもに成り込むことのはざまで身動きが取れなくなってしまうことがあるということである。この矛盾した2つの思いを抱えていることを受け止めてくれる他者が周囲に存在していることで、母親に願わしい対応が生まれる可能性が示唆された。このことは、子育てのスタートを迎える親の子育て支援の一つの姿を浮き彫りにすることにもなったであろう。以上の結果から、三世代にわたる三者

関係のあいだで＜調整する－される＞という関係が動いていくことがわかった。この関係が成り立つところに、親にとっても子どもにとっても情動調整の育ちが見いだされた点で本研究には意義があったと思われる。

しかしながら、＜調整する－される＞という関係が祖母から母へどのように伝わっていくのかといういわゆる世代間伝達の問題や、身体接触と両義的な思いを母親が抱くこととの関連性などの問題には踏み込んだ議論ができなかった。また、子どもが育つにつれて、祖母と母という親子のあいだ、夫婦のあいだで子育て観の衝突が起こり、そこにさまざまなかたちでの両義的な思いが浮き彫りになるだろう。今後は、これらの課題を視野に入れてエピソード記述を積み重ね、親子の育ちの支援につなげていきたい。

引用文献

- 1) 鯨岡峻 (1997) 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
- 2) 大倉得史 (2011) 育てる者への発達心理学 ナカニシヤ出版
- 3) 鯨岡峻 (1999a) 関係発達論の構築 ミネルヴァ書房
- 4) 鯨岡峻 (1999b) 関係発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 5) Stern, D. N. (1989a). 乳児の対人世界 理論編 (小此木啓吾・丸田俊彦、監訳、神庭靖子・神庭重信、訳). 東京: 岩崎学術出版社. (Stern, D. N. (1985). The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology. New York: Basic books.)
- 6) 奈良県子育て家庭サポートセンター (2007) 平成18年度 世代間交流子育て支援事業報告書～「子育ては祖父母の出番!」～
- 7) 栗山昭子 (2009) 地域における子育て支援と世代間交流 ふくろう出版
- 8) 渡辺久子 (2008) 子育て支援と世代間伝達 母子相互作用と心のケア 金剛出版
- 9) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2007) 保育のためのエピソード記述入門 ミネルヴァ書房
- 10) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2009) エピソード記述で保育を描く ミネルヴァ書房
- 11) 塚田みちる (2009) 乳幼児の自己調整の発達過程と親子関係の歴史—親の「こうしないで欲しい」を子どもが聞き入れるようになる過程— 風間書房
- 12) 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門—実践と質的研究のために 東京大学出版会
- 13) 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ ミネルヴァ書房
- 14) 鯨岡峻 (1998) 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房